

## 学 習 指 導 案

### I 小 単 元 名 明治政府とメディア：桜痴と諭吉

### II 小単元の目標

- (1) 統括目標 後述
- (2) 具体目標 後述

### III 小単元について

#### (1) 単元「幕末から日露戦争までの日本～国民と国家の形成～」について

「明治政府とメディア：桜痴と諭吉」は、「幕末から日露戦争までの日本～国民と国家の形成～」という単元を構成する小単元の一つである。そこでまず、簡単に単元「幕末から日露戦争までの日本～国民と国家の形成～」の主たる学習内容と単元構成について述べておきたい。

まず、この単元が採っている時期区分について述べよう。教科書が普通にとる「近世」－「近代」という区分と異なっているからである。

通史的な歴史書は多くの場合、幕末と明治維新とを別の巻にしている。昭和 40 年前後に刊行された中央公論社の『日本の歴史』(全 31 巻)、それよりおよそ 10 年後に刊行された小学館の『日本の歴史』(全 32 巻)、さらに新しいところでは平成 14～16 年にかけて刊行された吉川弘文館の『日本の時代史』(全 29 巻)が、そのようなかたちをとっている。

しかし、岩波の『日本通史』は、近代の巻をペリー来航から始めている。これは同時代人の感覚により近い時代区分ではないかと思われる。たとえば、日本海海戦時、東郷元帥の参謀を務めた秋山真之は「日本海海戦は 2 日間続いたが勝敗は最初の 30 分で決まった。ペリー来航後五十余年、国費を投じ、営々として兵を養ってきたのはこの三十分間のためにあった<sup>1)</sup>」ということを述べている。

平成に年号が変わったところに刊行された小学館の『大系日本の歴史』はさらに複雑で 11 巻が『近代の予兆』というタイトルの下、寛政の改革からペリーの来航までを扱い 12 巻が『開国と維新』ということでペリー来航から西南戦争までを扱っているのである。すなわち、ペリーの来航が歴史学の時代区分でいう近世と近代の 2 つの巻で扱われていることになる。これは歴史学者たちが、「封建時代」、「近代」という社会構成体の違いを優先した時代区分から出来事のつながりや当時の人々の感覚を大切にしたい区分の仕方を柔軟に取り入れようとしたことの表れといえるのかもしれない。

確かに明治維新によって、政権やその担い手が交替し社会構造も封建制から近代へと大きく変わった。したがって、社会構成体を第一義にしたアカデミズムの見方からすれば幕末と明治維新

<sup>1)</sup> 司馬遼太郎 1978 『坂の上の雲』文藝春秋社(文庫、第 8 巻)。

とを別巻とする構成は妥当なのであろう。

しかし、歴史教育的にはどうなのだろうか。

そのような区分にしたがって単元を組み立てるなら、幕末から明治にかけて、国家づくりの新しい方向を見出そうとして苦闘した人々が感じていた欧米勢力の脅威を江戸時代から続くものとして子どもたちに理解させることは難しくなる。

ペリーの艦隊に無理やり開国させられて以降、政権担当者たちの国づくりの目標は、端的に言えば「欧米列強に負けない強い国づくり」であり「その国を担いうる国民の形成」であった。日露戦争の勝利は、たとえそれが辛うじての勝利であっても、そうした「国づくり・国民形成」が成功したことの一つの証であった。

開国以降、戊辰戦争という内戦に勝利して明治国家の政権を担った人々が孜孜として努めたことは、まず日清戦争の勝利というかたちで花を咲かせた。これにより「日本」は台湾を得て「帝国」となり、欧米からも東洋の強国という評価を得るに至った。

それから10年。日本は日露戦争という世界の強国ロシアとの戦いに勝利して、その「強い国づくり」政策が成功したことを国内外に示したのである。

明治国家において政権を担当した人々、あるいは陰の実力者となった人々、すなわち大久保利通、伊藤博文、井上馨、山県有朋らは、みなペリーによる開国強制・幕府の「弱腰外交」に憤激し攘夷運動に奔走した人々である。大久保を除けば、日露戦争のときも彼らは依然として政権中枢にいて「帝国日本」を牽引していた。したがって、ペリーがやってきてから日露戦争で勝利するまでの約50年を一つの括りとするのは、決して無理なことではなく、むしろ逆に山県や伊藤などがロシアとの開戦に消極的だった<sup>2</sup>ことも生徒に理解させられるのである。これによって、「帝国主義」を採った日本が勢力拡大のために戦争を続けたという一方的な見方を生徒にさせないですむはずである。

歴史学者たちがペリーの来航を近代の巻に入れる場合があること、また、授業づくりという観点から見てもそうした方が、明治政府が行った諸政策を統一的に理解させられるということ、この二つの理由によって、本単元においては「ペリー来航から日露戦争まで」という区分を採った。

したがって、この単元で扱う主たる学習内容は次のようになる。

○国づくり①（内政）：強力な中央政府をつくるために版籍奉還・廃藩置県などが行われた。

○国民づくり（文教政策）：

- ・文明開化政策：欧米列強に侮られないだけの人智の開けた国にするために文明開化政策が進められた
- ・学校教育による戦う国民の形成：「強い国」をつくるには強い兵隊をつくらなくてはならない。そのために行われたのが学校制度の創設・整備である。

戦う国民の形成を担ったのが、実は師範学校及びその修了生であった。近代の軍隊は集団で行動できる兵士を必要とする。森有礼は師範学校に兵式体操をとり入れ、将来の教師たちを集団で動ける身体にした。彼らを通じて全国津々浦々に集団で動ける身体をもった

<sup>2</sup> 加藤陽子 2009 『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』朝日出版社、160 - 163 頁；172 頁。

国民を現出させたのである。

国民の模範となるべき天皇は江戸時代の衣冠束帯姿を捨て、軍服を身にまとった。それが御真影とされ、各学校に配付された。皇族も陸・海軍の将校の道を歩まされ、江戸時代の柔弱な公家とは違った姿を国民に示すようにさせられた。男性国民の理想像の一つが、天皇や皇族たちの身体によって示されたのである。

他方、皇后は日本赤十字社の発展に寄与し、戦う男たちを応援するという女性国民の理想的あり方の一つを示した<sup>3</sup>。さらに女性は良妻賢母教育を施され、家を守り立派な子どもを育てる妻・母という理想像が示された。男が安心して戦場に赴けるよう、また職場で励めるようにするのが良妻賢母教育であった<sup>4</sup>。

○国づくり②（経済政策）：殖産興業（北海道開拓も含めて）

兵隊を強くするには二つのことが行われなければならない。上述した人の育て（教育による戦う国民の形成）と強力な兵器の確保である。後者のために行われたのが北海道開拓なども含めた殖産興業政策である。金がなければ軍艦や大砲など兵器を買うことができない。軍艦や兵器を外国から購入する金の多くは、重工業を起こすまでは生糸の輸出によっていた<sup>5</sup>。こうした学習内容を、本単元では次のような構成で教えていきたい。

■ 1次 日露戦争、なぜ勝てた！？…………… 6時間

- 統括目標：国民の共通の歴史とされてきた語りを習得する。
- 具体目標と評価
  - ・ 欧米列強に負けない進んだ国づくりのために文明開化政策を進めたということを理解し、単元末のテストで正しく答えることができたか。 (知識・理解)
  - ・ 強い国づくりのため、生糸貿易等でもうけた金で欧米諸国から軍艦などを買うというしくみが出来上がっていたことを理解し、単元末のテストで正しく答えることができたか。 (知識・理解)
  - ・ 版籍奉還、廃藩置県がなぜ行われたのかを強い中央政府をつくるためだと論理的に考え、授業中、ノートにまとめることができたか。 (思考力)
  - ・ 強い兵士育成のために、学校がどんなことを教えていたか予想し、ノートに根拠に基づいて自分の考えを書くことができたか。 (思考力)
  - ・ 教科書・資料集、インターネットから、必要な情報を収集し、それをもとに自分の考えを広げたり深めたりしてグループ内発表に臨むことができたか。 (資料活用力)
- 学習課題：「たった4隻のペリー率いる米国艦隊に太刀打ちできなかった日本が、およそ50年後には大国ロシアのバルチック艦隊と戦って勝利を収めた。このおよそ50年の間に日本は何をしてこんなに強くなったのだろう。」

<sup>3</sup> 若桑みどり 2001 『皇后の肖像』筑摩書房。

<sup>4</sup> 深谷昌志 1998 『良妻賢母主義の教育』黎明書房；小山静子 1991 『良妻賢母という規範』勁草書房。

<sup>5</sup> 山本茂美 1977 『あゝ野麦峠』角川書店（文庫）。

○ 主たる学習活動

- ・ ペリーがやってきたときの、江戸幕府や諸大名、庶民の右往左往ぶりを理解させるとともに、ペリーの艦隊がたった4隻だったことに気づかせる。

続いて、日本海大海戦の様子についてのプリントを読み、ロシアのバルチック艦隊に日本の連合艦隊が大勝利を収めたことを把握させ、学習課題を子どもたちから引き出す。  
(1時間)

- ・ 強くなるために日本が行ったことを、次の四つの視点からグループで調べる計画を立てる。  
(1時間)

「優秀な兵器や軍艦を買うためのお金を日本はどうやって生み出したのか」：殖産興業政策；日清戦争での賠償金（教師は、最後の交流の時間に『ああ、野麦峠』などによって製糸工女の犠牲もあったことを教える必要があるだろうから、この間に資料を作成すること）

「優秀な武器や軍艦をつくったり直したりする技術者をどうやって育てたのか」：学校制度の整備とお雇い外国人、留学生（教師は、最後の交流の時間に明治初期にはお雇い外国人によって、高等教育が進められたことや北海道の開拓が進められたこと、鉄道が敷設されたことなどを教える必要があるだろうから、この間に資料を作成すること。また、日清戦争において清国兵は「規格の統一されていない兵器で戦っているところを見て、(清国に対して) ちょっと侮蔑感を<sup>6)</sup>抱いたということも教師の方から教える必要があろう）

「強い兵隊を生み出すために、日本の学校は子どもたちに何を教えたのか」（教師は、最後の交流の時間に天皇の肖像写真の変遷＝公家姿から軍服姿への変化に気づかせるなどして男性国民の理想像として軍人が示されたことに気づかせる必要があろうから、この間に資料を作成すること。では、女性国民の理想像はどんなものであったかが当然問題となるから「良妻賢母」であったことを示せるようにしておく必要がある。また生徒が調べてくることはもっぱら忠君愛国イデオロギーの注入関係であろうから、兵式体操によって集団で動ける身体がつけられていたことことを補足する必要があろう）

「当時の強国、イギリスやフランスに負けない政治のしくみを作るために日本は何をしたのか」（議会制度というものが単に民主主義を具現化するものという観点から評価されていたのではなく、欧米列強の強さの元とみられていたことも教師が補足する必要があるだろう）

- ・ 上記4つの「調べ課題」、それぞれについて二つのグループに担当させ<sup>7)</sup>、個人調べ→グループ内検討・まとめという構成で学習を進める。  
(2時間)
- ・ 調べた結果を交流するとともに、教師が理解をより深められるように補う。

<sup>6)</sup> 加藤陽子 2009 『それでも日本人は「戦争」を選んだ』朝日出版社、137頁。

<sup>7)</sup> 32～40人をの学級を想定している。1つのグループを4～5人とし、8グループつくる。

※ 補うべきことについては上述した。

■ 2次 明治政府とメディア：諭吉と桜痴（本小単元）…………… 3時間

- 統括目標：政治権力とメディアの関係のあるべき姿について自分の見解を深めることができる。
- 具体目標と評価
  - ・ 明治政府が文明開化政策を進めるために新聞を保護育成したことを理解し、単元末のテストで正しく答えることができたか。（知識・理解）
  - ・ 民撰議院設立建白書が政府に提出された後、大新聞が政論新聞化し国会の早期開設に消極的な政府を攻撃する論説を展開したことを理解し、単元末のテストで正しく答えることができたか。（知識・理解）
  - ・ 自由民権運動の経緯について概要を理解し、期末のテストで正しく答えることができたか。（知識・理解）
  - ・ 一連の士族反乱の経緯について概要を理解し、期末のテストで正しく答えることができたか。（知識・理解）
  - ・ 反政府の立場をとる政論新聞を取り締まる方策を具体的・論理的に考え、授業中、ノートにまとめることができたか。（思考力）
  - ・ 政府の政論新聞取締りの方策を理解し、それについて根拠に基づいて自分の評価をまとめることができたか。（判断力）
- 学習課題：「(日露戦争に勝利できるような強い国、戦える国民を明治政府はとにかく作ることに成功しました。そのために政府は、文明開化政策も進めたし、国会も開設しました。強い軍隊をつくるために国をリッチにすることにも頑張りました。ところが明治8年ごろから10年代後半にかけて政府に早く国会を開設しろ、いつまでも国会を開かないで、薩長土肥の出身者だけで政治をやっているのはけしからんという自由民権運動が起きます。新聞もこれに同調するものが多く、政府を攻撃するような論がそうした新聞に次々と載せられます。政府は別に国会を開かないつもりではなく、もう少し国民が文明化されたら開くつもりでいたのです。

そこで、みなさんに聞きます。みなさんが政府の中心にいる人だとして、こうしてやたら政府攻撃をする新聞に対して、次の三つのうちのどの対策をとりますか。

A：徹底的に取り締まる

B：政府に味方する新聞を育てる

C：中立新聞を育てる

さあ、どれにするかといわれても困りますね。そこで、実際に明治政府がやったことをみなさんに示します。そのうえで、自分はどのやり方が一番良いかを考えてみてください。」

○ 主たる学習活動

- ・教師の用意した資料を読み、明治4年ごろから14年ごろまでの政府の新聞政策の推移を理解する（文明開化推進の手段として育成する政策→大新聞が政論新聞化し反政府の論陣を張ったことに対抗して弾圧策→中立新聞の育成）（1時間）
- ・A、B、Cそれぞれの立場を担当し、まず個人でその政策を徹底化するために何をすべきか、その政策の良さは何か、他の2政策の短所は何かを考え、その後、同じ立場を割振られた者同士で4～5人の小グループをつくり、考えを深め、広げる。（1時間）
- ・教師に選ばれた各グループ4名の者が代表となり、全体で簡易ディベートを25分行う。簡易ディベートの後、各自は自分の本当の立場で意見をまとめる（時間が20分ほどしか取れないのでまとめきれない場合には翌日までに家でまとめて来させ、ノートを提出させる）。（1時間）

※ 簡易ディベートとしたのは、勝ち負けをつけない、したがってジャッジを置かないなど

本来のディベートの方式をとっていないからである。

## （2）本小单元について

### ①構成について

本小单元は、歴史学習であると共に、メディアリテラシーの学習、特にメディアに対する政府の「政策吟味学習」になっている。

こうした構成にしたのは、授業者の社会科歴史観による。すなわち、社会科歴史は単なる歴史学習とは異なるべきものであり、したがって可能な限り、歴史学習以外の要素も組み込み、より豊かに公民的資質を育成すべきだという考え方である。

### ②歴史学習の側面について

歴史学習としては、政府の文明開化政策（その一つとしての新聞メディアの育成）や民選議院設立建白書提出以降の自由民権運動の盛り上がり、政府の自由民権運動取り締まり政策を学習内容とした。またこの流れの中で西南戦争など一連の士族反乱をとりあげた。

以下、詳述しよう。

そもそも江戸時代には新聞というものがなかったから、明治になったばかりの頃、人々にとって新聞は未知のもの、あるいは目新しいが概念のはっきりしないものであった。

しかし明治政府の高官たちの中には、文明開化政策を進めるうえで新聞が重要であると考えた者がいた。西洋にある新聞は、人智を高め国中に文明を行き渡らせる上で大いに役立つと考えたのである。そうした考えを持った代表的な人物として、木戸孝允と前島密などを挙げることができる。

こうした政府高官の意を受けて、新政府は新聞を有効に活用して文明開化政策のいっそうの発展を図ろうとしたのである。

初期の新聞は、実際そのようなものとして機能した。この時期は明治 4 年ごろから明治 7 年ごろまでで、啓蒙新聞期とよぶことができよう。

ところが、明治 7 年 1 月 17 日に民選議院設立建白書が左院に提出され、さらにその草稿が「日新真事誌」によってすっぱ抜かれるに及んで、新聞はその性格を大きく変えることになる。国会を開こうとしない政府を非難する政論を載せる政論新聞へと変貌したのである。

政府は当然のことながら、こうした反政府的な言論を取り締まろうとする。それが明治 8 年 6 月の改正新聞紙条例であり讒謗律であった。この法律によって多くの新聞記者がとらえられ牢に入れられた。そのため、頭のおかしくなった者も出たという。新聞側は、こうした政府の過酷な取り締まりに対して、新聞大施餓鬼などというものをやって世間に政府のひどさを訴えた。このときは、御用新聞の『東京日日新聞』さえ、政府に抗議する側に回ったのである。

西南戦争の時期を除くと、このような政論新聞期というのは、明治 7 年ごろから国会開設が詔勅によって決定される明治 10 年代後半まで続く。

この時期、福地桜痴は基本的には政府の側に立ち「民選議院時期尚早」の論説を『東京日日新聞』に展開し、「民選議院の早期開設」を要求する『朝野新聞』や『郵便報知新聞』など民権派の新聞と対立する。山本武利の表現を借りるなら「桜痴は御用記者として民権記者の挑戦を一手に引き受けて奮闘。政府は政府で様々の形で桜痴の言論活動を側面援助<sup>8</sup>」した。

西南戦争以降は、民権派の新聞はほとんどが政党の機関紙化する。それは当時の人々の分類に従えば、次のようであった<sup>9</sup>。

○政府系（御用新聞）：『東京日日新聞』、『明治日報』（明治 14 年；丸山作楽）、『東洋新報』（明治 15 年；水野寅次郎）

○自由党系：『自由新聞』、『絵入自由新聞』、『自由<sup>じゆうのともしび</sup>燈』、『朝野新聞』

○改進黨系：『郵便報知新聞』、『東京横浜毎日新聞』（「横浜毎日新聞」が東京に進出し、このように名称を改めた）、『改進黨新聞』、『読売新聞』、『朝野新聞』

政党の機関紙化した民権派諸新聞は、北海道官有物払い下げ事件、明治 14 年の政変などによって、その舌鋒をいよいよ鋭くし論調は過激化する。

こうした事態を憂いた福沢は、政府系でもなく民権派でもない、しかし世論を正しい方向に導くことの出来る「独立新聞」を出すことを決意し、『時事新報』を創刊する。

この『時事新報』の影響や自由民権運動の退潮を受けて、政党機関紙化し政論を重視する新聞よりも報道を重視する「中立」を標榜する『朝日新聞』などが読者に受け入れられるよ

<sup>8</sup> 山本武利 1973 『新聞と民衆』紀伊國屋書店（但し、筆者が参照したのは 2005 年の復刊版）、18 頁。

<sup>9</sup> 山本、同上書 22 頁。『朝野新聞』が自由党系とされるとともに改進黨系ともされていることについて、山本は、…（略）…同紙の花形記者の鉄腸が自由黨員、社長の柳北が改進黨員という風に、両政黨員が机を並べて同一紙面を編集執筆していた」（22 頁）ためとしている。ただし、山本は実際には「自由党色がやや強かった」（22 頁）としている。

うになる。「報道新聞期」である。

こうした福澤の『時事新報』発行や『朝日新聞』の東京進出の裏には政府のはたらきかけ（福澤の場合）や金銭的援助（『朝日』の場合）があったことが現在研究者たちによって明らかにされている<sup>10</sup>。

本小單元では、こうした歴史的出来事を踏まえて、歴史学習としては冒頭に述べたように

- ・ 政府の文明開化政策の一つとしての新聞メディアの育成
- ・ 民選議院設立建白書提出以降の自由民権運動の盛り上がりと政府の自由民権運動取り締まり政策
- ・ 西南戦争などの士族反乱

をとりあげる。

これによって、学習指導要領にあることをカバーできるはずである。

しかし、本小單元には学習指導要領にないメディア学習（メディアに対する政策吟味学習）という側面がある。以下、この点について説明する。

### ③メディア学習の側面について

本小單元になぜ、メディア学習（メディアに対する政策吟味学習）の要素を組み込んだのか。基本的には、社会科歴史は単に歴史学習とすべきではなく、政策吟味学習となるような要素を組み込むべきだと考えているからである。

本單元の場合、歴史学習とする時期が、ちょうどわが国に新聞という近代メディアが誕生し成長していく時期にあっている。そこで、メディアをとりあげ、メディアに対する政府の政策を吟味させることで、メディアと権力の関係の在り方について生徒に省察させるようにした。

すなわち、明治の初年から 7 年ごろまでは明治政府が文明開化政策を進め、そのために新聞を育成した時期にあたる。また 7 年以降は新聞が政論新聞化し、盛んに政府攻撃をした時期である。こうした歴史事実を教えながら、メディアの在り方、メディアと権力の関係のあるべき姿について生徒の見識を深めることによって、単なる歴史学習を乗り越え政策吟味学習としての社会科歴史の単元を構成できると考えたのである。

このような「政策吟味学習としてのメディア学習」は、従来のわが国のメディアリテラシー学習が行っていないことを二つの点において実践しようとしているものである。

一つは、メディア史の成果を取り入れて学習内容を作っていることである。今一つは、メディアリテラシー学習に政策吟味学習という性格を与えていることである。

一つ目の点から敷衍しよう。

わが国におけるこれまでのメディアリテラシー学習においては、メディア史の成果はまったく参照されていない。

わが国のメディア学習は、英国やカナダのメディア学習ないしはメディアリテラシー学習

---

<sup>10</sup> 有山輝雄 2008 『「中立」新聞の形成』世界思想社。



の成果を参考に教材開発や単元開発が行われているため、メディア史の成果を参照した教材開発や授業開発が行われていないのである。

すなわち、現代のメディアの性格やメディアが発したテキストを分析する技能の育成を図る授業実践やその報告はなされているが、過去の人々がメディアとどのように付き合いしてきたか、どのようなものとして活用してきたのかについては全くとりあげられていない。したがって過去においてメディアがどのような役割を果たしてきたか・政治権力とどのような関係にあったかなどを手がかりにして、子どもたちのメディアについての考えを深めようという実践は見られないのである。

メディア史の成果によれば、明治期において新聞というメディアは、日本人にとってまったく新しいものであった。そうした新聞を政府は文明開化の良い手段になるとして保護育成しようとしたのである。しかし、このことも従来の歴史教育においてはとりあげられてこなかった。

また、英国などの新聞が労働党系とか保守党系とか政治的立場が明確であるとされ、それでも一流紙であるとされているのに対して、わが国の場合、一流の新聞は公正中立であるべきだとされ政治的立場を出さない新聞がよきものとされている。こうした彼我のメディアの在り方の違いがなぜ生まれて来たのか、特にわが国の「中立新聞」がいつ・どんな経緯で誕生したのかについてもこれまでの社会科授業では取り上げて来られなかった。したがって、公正中立というメディアの在り方が本当に良いものであるのかなどについて省察的に考えさせるということも行われてこなかったのである。

本小単元におけるメディアリテラシー学習は、メディアが発したテキストを批判的に読み解く技法を伸ばすものではなく、また現代資本主義の下にあるメディアの商業主義に気付かせるものでもなく、メディアには立場があるといった政治社会的な見方を育成しようとするものでもない。それらは他の単元に譲る。

ここでは、メディア史の成果を参照してわが国の人々にとっての新聞の意味・意義の推移を学ばせることによって、生徒一人一人のメディアの在り方に対する見識を高めたのである。

わが国においては、自由民権期に政党機関誌化した新聞各紙の在り方を憂いた福澤諭吉や政府首脳によって「独立新聞」や「中立新聞」が生み出された。そしてそれが今日に至るまで、一流メディアは「公正中立であるべきだ」という我々のメディア観を規定している。しかし、上述したように英米の一流紙は必ずしも「中立」ではなく明確な政党色を持っている。

我々のメディア観を絶対のものとしせず、それが形成された淵源に立ち返らせるとともに外国との比較によって、生徒のなかにあるメディア観にゆきぶりをかけ、確かな論拠による一層自覚的なメディア観を形成させたい。

2点目の「政策吟味学習」としてのメディア学習とはどういうものであろうか。社会科という教科は政治という「公」の領域に関心と一定以上の見識を持った国民を育成する教科であるべきだという社会科教育観が、「政策吟味学習」の根底にはある。

本小單元においては政策吟味学習として、明治政府のメディア政策を吟味させる。そのために新聞紙条例や讒謗律などによるメディア弾圧政策、「御用新聞」への応援、「中立新聞」へのひそかな援助と育成という、明治政府が実際に行った 3 つの方策をとりあげ、それぞれの長短について、生徒に検討させる。これによって政治権力とメディアの関係の在り方について生徒の見識を高めようとしているのである。

#### IV 小單元各時間の略案

##### (1) 1 時間目

時間配分	教師の働きかけ	児童の反応	指導上の留意点 (資料)
------	---------	-------	-----------------

20  
分

○前時までの復習と事象提示

「前の時間までにやったこと覚えていますか。たった4隻の黒船すら追い払うことができず、半ばむりやり開国させられてしまった江戸時代の日本が、それからわずか50年ほどたった時、すなわち明治38年には、日露戦争に勝つまでになっていましたね。こうした変化がなぜ可能だったか。みなさんに調べてもらってやってきましたが、一言でいうと、明治政府の国づくり・国民づくりが大成功だったということですよ。

例えば、政府は文明開化政策を進めて西洋人に負けないような知識を身に着け、礼儀作法を身に着けた国民を育成しようとしていました。そのために実は新聞がいいと考えた政府の偉い人、政府高官といいますが、政府高官がいました。

たとえば木戸孝允、前島密です。

木戸は『新聞雑誌』という新聞を明治4年、部下に命じて出させます。この『新聞雑誌』は明治8年6月からは『東京曙新聞』となります。

他方、前島密はこれまた部下に命じて『明治5年に郵便報知新聞』を出させます。当時、えきていりようのかみ 駅 通 寮 頭（現在の郵政大臣）をやっていた前島は、新聞を育てるために新聞の記事を送る場合は郵便料金は無料、新聞紙を送る場合もただというきまりを作りました。

こういう政府の人たちと比べて、一般の人たちが新聞についてどれくらい、今の私たちの常識からかけ離れたところにいたかがわかるエピソードがあります。それをみなさんに紹介しましょう。（資料1を配付）

「さあ、そこで政府は何をしたか。新聞を保護育成しようとしたのでしたね。新聞の方も、そうした政府の期待に応えようとして文明開化

生徒は資料1を読む。

資料1：「新聞は毎日買うものだって!？」



をやっているのはけしからんという自由民権運動が起きます。新聞もこれに同調するものが多く、政府を攻撃したり政府の高官のことを悪く言うような記事がそうした新聞に次々と載せられます。

政府は別に国会を開かないつもりではなく、もう少し国民が文明化されたら開くつもりでいたのです。それに個人攻撃されたら腹が立ちますよね。

そこで、みなさんに聞きます。みなさんが政府の中心にいる人だとして、次の三つのうちのどの対策をとって新聞の政府攻撃に対抗しますか。

A：徹底的に取り締まる

B：政府に味方する新聞を育てる

C：中立新聞を育てる

さあ、どれにするかと急に言われても困りますね。そこで、実際に明治政府がやったことをみなさんに示します。そのうえで、自分は何のやり方が一番良いかを考えてください。」

「まず、Aです。政府は次のようなことをやりました。明治8年、新聞紙条例と讒謗律というのを作って、政府の政策を批判するような記事を書いた新聞は発行停止、記事を書いた人は罰金を払わせるとともに牢屋に入れるということをはじめたのです。もう少し詳しく書いた資料を読んでもらいましょう（資料3を配付）。

「次にBです。政府に味方する新聞を育てるといっても、政府批判の新聞ばかりでは育てようにも育てられませんね。ところが明治8年以降でも政府に味方する新聞があったしまたそういう新聞記者もいたのです。福地源一郎という大新聞記者が社長を務める『東京日日新聞』です。

それでは、資料4を読んで福地や『東京日

資料3を読む。

資料3：「逆らうの？  
それなら牢と罰金  
だ！！」

<p>3分</p>	<p>日新聞』や福地源一郎についての知識をしっかりとしたものにしておきましょう。」</p> <p>「さあ、最後はCです。政府が中立新聞を育てるというものです。政府の味方をするわけでもない。民権派の味方をするわけでもない。両方の言い分をよく聞いて、第3の道を示すかあるいは政府にとってまあ、安心できるような政策を示したり政論を展開したりする新聞をつくるということです。そんな都合のいい新聞をつくることのできる人がいるのだろうか。いたんですね。政府が目をつけたのは、福澤諭吉でした。福澤に頼んで、中立の新聞、福澤は「独立新聞」と言っていますが、それをつくろうとしたのです。では、資料5を読んでもう少し詳しい情報を手に入れましょう。</p> <p>「さあ、みなさんは、どれをとりますか？といってもなかなか自分では決めにくいと思いますから、まずは先生が勝手に割り振ってしまいます。1班と6班はとりあえずAの「徹底取り締まり派」をやってください。2班と5班は「政府の見方を育てよう派」をやってください。3班と4班は「中立新聞つくろう派」です。</p> <p>○次時予告 次の時間、一人ひとりに「その立場をとるとどんないいことがあるか。その立場を徹底するために何を行うか。他の立場ではなぜだめか」を考えてもらいます。」</p> <p>では、今日はここまでで終わりました。</p>	<p>資料4を読む。</p> <p>資料5を読む</p>	<p>資料4：「政府は正しい、国会なんてまだ早い！」</p> <p>資料5：「このままにしておけない！」</p>
-----------	---	------------------------------	--

## VI 授業資料（小単元Ⅱのもののみ）

### （1）資料1 「新聞は毎日買うものだって!？」

そもそも、江戸時代には新聞というものがなかったから、明治になったばかりの頃、人々にとって新聞は未知のもの、あるいは目新しいがなんだか中身のはっきりしないものであった。

それを示す次のようなエピソードがある。『日新真事誌』という新聞を創刊した英国人ブラック（1827～1880年）が、購読勧誘のために東京のある大きな商店を訪ねたときのことである：

その商店の主人が、たまたま買って持っていた「日新真事誌」を取り出して、大変よいものだとほめた。そこでブラックが、年間購読をしてくれないかと頼んだ。すると、

主人 「ここにちゃんとあるじゃありませんか。これ以上、要りませんよ。」

ブラック 「いや、それは一日分の新聞ですよ。そういう新聞が毎日出るんです。」

主人 「それはそうでしょうが、一部あるのにその上、毎日取ったって仕様がないうちありませんか」（番頭たちは旦那の機知ある断り方だと思って笑って聞いているが、そこへ小僧がしゃしゃり出て）

店の小僧 「だんな様、それは違いますよ。新聞は毎日出ますけれど、同じことなんて書いてありませんよ。その出る前の日に起きた新しい事柄が書いてあるんです。」

主人 「えっ、何だって？」

主人、不思議そうに目を瞠って

主人 「毎日新聞が変わる度に別な新しいことが書いてあるんだって？そんな馬鹿げたことなどありっこないじゃないか。」

そして「年極め読者にはならぬことと、もし入用の節は本屋に使いを遣って買わせるから」といって断ったというのである。

### （2）資料2：「郵便のことをよく知って利用しましょう！」（『郵便報知新聞』23号、明治5年10月；ただし、読みやすいように言葉づかいを現代風にやさしいものに直してある）

東京の三河3丁目に鈴木半右衛門という者が住んでいる。この者が駅通寮に雇われて、郵便の集配の仕事をするようになったのだが、ある時、入船町のポストから集めた手紙の中に切手を貼らないで、直に銭100文を結び付けたものをみつけた。半右衛門は、だれにも分からないだろうと、この銭100文を取りそこへ使用済みの切手を代わりに貼り付けておいた。

誰にもわからないだろうというのは浅はかな考えで、本局ではすぐにそれを発見し、だれがそのようなことをしたかまでつきとめ、鈴木半右衛門を警察に引き渡した。裁判の結果杖で60回打たれるということになり、実際、それが行われたのである。

こういったことはよく起こっていることである。したがって、郵便を利用するものはきちんと切手を買ってそれを張って出さなくてはならない。銭などを直接結びついたりしてある手紙などをみると、悪い心が生まれるかもしれない。罪を犯さなくてもよい人に罪を犯させることになっ

てしまわぬよう、規則をよく読んでそれに従って郵便を利用しようではないか。

### (3) 資料3:「逆らうの?それなら牢と罰金だ!!」

資料1, 2で見てきたように明治になったばかりの頃、<sup>いっぽん</sup>一般の人々は新聞というものがよくわかっていませんでした。そういう新聞を、文明開化の手段として役立つものだと見た明治政府は<sup>ほご</sup>保護を与えて育ててきました。

ところが、明治7年1月、英国人ブラックの『日新真事誌』が<sup>にっしんしんじし</sup>民撰議院設立建白書の中身をすっぱ抜いて世間に公表してからは、新聞には「早く国会を開設すべきである」とか「それをやらない政府はけしからん」といった、政治の<sup>あ</sup>在り方を論ずる<sup>ろんせつ</sup>論説記事や政府を攻撃する<sup>こうげき</sup>ような記事が多くみられるようになりました。そういう記事を書いた方が人々によく読まれ、したがってよく売れたからです。つまり学問のある人たちが読む新聞は、単に「文明開化を進めなくてはいけない」「今、国内外ではこんなことが起こっている」といった「啓蒙を説く新聞」あるいは「報道新聞」から政府を激しく批判する<sup>せいろん</sup>「政論新聞」に変わったのです。

政府は国会をすぐに開くべきだという主張に対して、まだ早すぎると言って国会を開こうとはしませんでした。政府の主張を支持する人たちを<sup>かんけんぱ</sup>「官権派」といい、「そもそも国民には政治に参加する権利があるのだから、そのための国会をできるだけ早く開くべきだ」という主張をする人たちを「民権派」といいました。

民権派新聞の激しい政府批判を封じるために、政府は明治8年6月に「新聞紙条例」16カ条と<sup>ざんぼうりつ</sup>「讒謗律」8カ条を出しました。これは政府のやることや<sup>かんり</sup>官吏個人に対する批判や攻撃を全面的に禁止し、違反した新聞記者には体刑を科すというものでした。大久保利通が進めさせたものだとされています。

その条文の一部を示します：

<<sup>ざんぼうりつ</sup>讒謗律>明治8年6月28日(太政官布告第110号)

第3条 皇族を犯すに渉る者は<sup>きんごく</sup>禁獄15日以上2年半以下、<sup>ぼっきん</sup>罰金15円以上700円以下

第4条 官吏の職務に関し<sup>ざんき</sup>讒毀する者は<sup>きんごく</sup>禁獄10日以上2年以下、<sup>ぼっきん</sup>罰金10円以上500円以下。<sup>ひぼう</sup>誹謗する者は<sup>きんごく</sup>禁獄5日以上1年以下、<sup>ぼっきん</sup>罰金5円以上300円以下

第5条 華士族平民に対するを論ぜず、<sup>ざんき</sup>讒毀する者は<sup>きんごく</sup>禁獄7日以上1年半以下、<sup>ぼっきん</sup>罰金5円以上300円以下。<sup>ひぼう</sup>誹謗する者は<sup>ぼっきん</sup>罰金3円以上100円以下

<新聞紙条例>明治8年6月28日(太政官布告第111号)

第12条 新聞紙若しくは雑誌雑報において人を<sup>きょうさ</sup>教唆して罪を犯さしめたる者は犯すものと同罪、その<sup>きょうさ</sup>教唆に止まる者は<sup>きんごく</sup>禁獄5日以上3年以下、<sup>ぼっきん</sup>罰金10円以上500円以下を科す。その<sup>きょうさ</sup>教唆して<sup>きょうしゅう</sup>兇衆を煽起し或いは官に強逼せしめたる者は犯す者と同じく論ず。その<sup>きょうさ</sup>教唆に止まる者は罪、前に同じ

これによって、当時の各新聞社がどのような<sup>ひつか</sup>筆禍をこうむったのでしょうか。次のような数字があげられています。



この二つの布告で、明治八年八月以降、新聞記者にして禁獄の刑に処せられるもの、明治八年中において一件、明治九年中において八六件、明治一〇年において四七件に上っている。明治九年の如きは『評論新聞』<sup>11</sup>一社にて二五人、『采風新聞』一社にて一〇人、『朝野新聞』六人、『郵便報知新聞』五人、『湖海新報』<sup>12</sup>五人、『草莽雑誌』四人、御用紙といわれた『東京日日新聞』でさえ二人の禁固以上の筆禍を受けている。

そこで新聞各社から代表が出て、善後策を話し合いました。

『東京日日新聞』からは福地桜痴と岸田吟香

『郵便報知新聞』からは藤田茂吉

『朝野新聞』からは成島柳北

『曙新聞』からは末広鉄腸

『評論新聞』からは横瀬文彦

という当時一流の新聞社から一流の新聞記者たちが、そのメンバーでした。

相談の結果、明治9年6月28日に世間をあつと言わせるようなことが浅草の浅草寺で催されました。首都18社の新聞社代表たちによる「新聞供養大施餓鬼」である。新聞紙条例・讒謗律が出されて、ちょうど1年後のことでした。

その数日前に首都すべての新聞に次のような広告が載りました。

「来る二八日午後二時半より新聞供養の大施餓鬼を浅草観世音の本堂にて修行いたし候間、随喜の御方は御参詣勝手次第」。

広告は、新聞に掲載された横死者の霊を鎮魂するためであると断っていました。

その日、本堂正面には、一尺角にもなろうかという巨大な卒塔婆が建てられました。

大施餓鬼は、雅楽演奏から始まりました。これが開会の宣言でした。つづいて数十人からなる僧侶たちの読経が本堂に響きわたります。その中を首都一八社の代表たちが卒塔婆の前に進み出て、香を炊き、祭文を読み上げました。いかにも荘厳な様子でした。祭文の朗読が順々と進み、最後から二番目に『朝野新聞』社長成島柳北が祭壇の前に立った時、読経はひときわ大きく響きわたり、供養はクライマックスを迎えました。成島柳北は十日前出獄し、この人を食った施餓鬼を発案した張本人でした。

そしてしんがりを務めたのが御用新聞「東京日日」の福地源一郎でした。政府の味方であるはずの御用新聞『東京日日新聞』さえ、筆禍をこうむり牢につながれ罰金を取られるものがいたために福地はこれに参加したのです。

こうして、反政府の政論がますます燃え盛るはずだったのですが、施餓鬼から八か月が過ぎた

<sup>11</sup> 明治8年3月創刊。主宰は海老原穆であった。この新聞は「民権派の動きを載せる一方で『前原一誠誓約書』（第一号）や山本克の三条弾劾状（第一四号）を掲げるなど復古派にも共感を示し、反政府色を露わにしていた」（佐々木、1999年 60頁）というものであった。

<sup>12</sup> 春原昭彦は、『草莽雑誌』と『湖海新報』を「『評論新聞』とならんで、当時最も過激な主張をしていた」（春原、2003年 36頁）ものとしている。

明治10年2月ごろになると、政府攻撃や新聞社同士の論戦がびたりと止みます。

人々の関心が政論よりも明治維新の最大の功労者、西郷隆盛の起こした西南戦争に向いたからです。

#### (4) 資料4:「政府は正しい、国会なんてまだ早い！」

福地源一郎はもともとは幕府の通訳をやっていた人でしたが、幕府がつぶれてしまったときからしのためもあって『江湖新聞』という新聞を出します。

その紙上に幕府寄りの記事や「新政府批判」などの記事を書いたりしたので、薩長政府にいらまれます。

薩長政府は1868年5月、上野の山に立てこもった彰義隊を鎮圧した後、幕府寄りの記事載せていた新聞をすべて発行禁止にするとともに、福地源一郎を捕まえ牢に入れてしまうのです。

牢に入れられた福地は、自分はろくな裁判を受けることもなく首を切られてしまうのではないかと青くなったのですが、友人たちのおかげで薩長政府の大物である木戸孝允が動いて、無罪放免とされました。

福地はその後、渋沢栄一を介して伊藤博文と知り合い意気投合します。そして伊藤の勧めを受け容れて大蔵省に出仕するようになります。

福地の大蔵省役人としての最初の仕事は伊藤のお供をしてアメリカに行き、貨幣制度を調査することでした。このときの洋行は明治3年11月から4年5月まで7か月に及びました。この旅行を通じて、福地は伊藤とさらに仲良しになったのです。

さらに明治4年12月にふたたびアメリカ、そしてヨーロッパへ行くことになります。岩倉具視、木戸孝允、大久保利通、伊藤博文たちの全権使節団の随員となったのです。このとき北海道開拓使が送った日本最初の女子留学生たち（大山捨松、津田梅子など）も一緒でした。

この旅の途中から福地は陪審制度を調べるために一行と別れて、トルコ・エジプトを回って明治6年7月、帰国しました。実に1年7か月ぶりの日本でした。

しかし、帰ってきた福地が目にしたのは、親しかった井上馨（大蔵大輔；大久保利通が大蔵卿で大臣だったので、次官ということになる）、渋沢栄一（大蔵権大丞）が去った大蔵省でした。二人は司法卿だった江藤新平と予算をめぐる対立し、大蔵省を去っていたのです。自分を引き立ててくれる人がいないところにも仕方がないと辞意を固めましたが、井上の後を襲い大蔵省を預かった大隈重信に慰留されて一旦は大蔵省にとどまりました。

しかしその後、征韓論争で政府が割れ、明治6年に西郷、板垣、後藤、江藤らが政府を去り、さらに翌7年に健康がすぐれないことを理由に木戸も辞職しました。恩人である木戸の辞職を見て、福地もとうとう大蔵省をやめたのでした。

その後、一緒に『江湖新聞』をやった条野伝平<sup>13</sup>に頼まれて『東京日日新聞』に入り後に社長となったのです。

『東京日日新聞』は政府の政策をそれほどひどく攻撃することもなく、また国会開設論では政

<sup>13</sup> 条野伝平は、江戸時代には「山山亭有人」という名前で戯作を書いていました。

府に味方して「国会尚早論」を唱えていました。

国会開設をめぐる、他の大新聞がみな急進論をとりその早期開設を盛んに論じたのに対し、福地は「漸進主義」を打ち出しました。すなわち、まず民会（市町村会）を起し、次に府県会を起し、それから国会を起すべきだと主張したのです。

これは、明治8年1月に秘密のうちに開かれた大久保、伊藤、木戸、板垣たちのいわゆる「大阪会議」で決められた漸進的立憲主義と同じものでした。ただし、福地の主張の方がこの会議より早いのです。

大久保と伊藤はこの会議で木戸と板垣を納得させ、二人を政府に呼びもどすことに成功したのです。木戸と板垣は参議になりました。

再び参議となった木戸は、明治8年6月に第1回地方官会議を主催することになりましたが、このとき、会議の指導を福地にたのんだのです。すなわち、ヨーロッパのことをよく知る福地に、会議の順序、発言の方法、採決の仕方などを指導してほしいとし、福地は新聞記者でありながら、書記官として働いたのです。

福地はこのために民権派から憎まれ攻撃されることになりました。しかし、「新聞は政府と国民の間を取り結ぶ通弁とならねばならぬ」という考えを持つ福地は、あくまで漸進主義の立場を曲げなかったのです。

新聞が反政府の言論を展開するものとして、いよいよ過激化していくかと思われた明治10年2月、鹿児島で西郷隆盛が反政府の軍を立ち上げました。いわゆる「西南戦争」の勃発です。明治10年2月13日、西郷軍が編成され、翌14日に東京めざして先鋒隊が出発したのです。

このとき福地源一郎は37歳<sup>14</sup>でした。この戦争への対し方がジャーナリストとしての福地の名をいっそう高くすることになったのです。

福地は2月22日に西南戦争の取材のために東京を立ち京都に向かいました。京都ではまず木戸に会いました。それから大阪に行き伊藤に会いました。伊藤に

「大阪にただけでは戦況は正確にわからないだろう」

といわれ、福地は自ら戦地に赴いたのです。

戦地である熊本に着いたものの、当時は従軍記者というものが認められていなかったので戦場に入れませんでした。そこで、指揮を執っている陸軍卿（陸軍大臣にあたる）山県有朋にかけ合い、軍の記録係にしてもらいました。肩書は「参軍本営記室」というものでした。長州閥である山県とはかねてからの知り合いだったからこうしたことができたのです。

こうして取材活動を黙認された福地は「戦報採録」と題して現地ルポを次々と送りました。たとえば、田原坂の戦いを伝えた記事は次のようなものでした。

朝まだ暗いうちに、田原坂で激戦が始まったというので二人曳きの人力車で戦場の行われているところに駆けつけた。賊軍（西郷軍）の抵抗が激しいので、抜刀隊を使って切り込みをかけようということが決定された。東京から戦争のために来ている巡査のなかから36名が選ばれ、各々、長剣を掲げて兵

<sup>14</sup> 福地は1904（明治37）年、64歳でその生涯を閉じた。

隊の後に続いて、敵陣近く進んだ。敵兵との距離は 50 メートルから 100 メートルばかり。近いところでは相手の顔がはっきりとわかるような距離だった。賊軍に一齐に射撃を浴びせると相手も応戦し、激しい撃ち合いになった。頃合を見計らって撃ち方をやめ突撃ラッパを吹き鳴らした。今こそとばかり、抜刀隊が関の声をあげ白刃を閃かせ、敵陣の中に切り込んでいった。兵隊たちも銃剣を振ってこれに続き、賊兵を突きまくった。賊軍はたまたまらず、蜘蛛の子を散らすようにして逃げ出した。その数、およそ 300 ばかり。官兵（政府軍の兵士）はこのときを逃してはならじとばかり、背後から一齐に射撃したから賊軍はひとたまりもない。見る間に数順がばたばたと倒れたのである。

このような福地の戦場ルポは評判を呼び、『東京日日新聞』の読者を急増させました。七、八千だった購読数が一気に一万を超え 1 万 5 千部にまで達したのです。ライバル紙の『朝野新聞』と『郵便報知新聞』が二千、『東京曙新聞』にいたっては、七、八百という状態でしたから、『東京日日新聞』の売り上げの増加ぶりがわかろうというものです。

また、これは福地の名を高からしめることにもなりました。

明治 10 年 4 月 6 日、福地は京都御所で天皇、諸大臣たちに戦地の実情を 2 時間以上にわたって言上することになりました。その後、これに対して御召縮緬 2 反と金 50 円が天皇から下賜されました。

「新聞記者など食い詰めた貧乏書生がなるものだ」と言われていたのに、天皇の前で戦況報告をしたということは、福地にとってこの上ない名誉でありまた新聞記者の社会的評価を高くするものでした。

明治 12 年、アメリカからグラント将軍がやってきたときには、福地はグラント夫人の案内役まで仰せつかりました。福地は天下の名士となったのです。

#### 資料 5 : 「このままにしておけない！」

政府は、自由民権運動の高まりとそれを支える新聞の政府攻撃に頭を悩ませていました。そこで、政府系の新聞をつくることを決めいろいろ手を打ってきました。つまり、反政府の論陣を張る新聞を懐柔する一方、政府の言うことを擁護するような新聞を育てようとしてきたのです。それが福地源一郎が社長を務める『東京日日新聞』であり、また丸山作樂の『明治日報』（明治 14 年）、水野寅次郎の『東洋新報』（明治 15 年）でした。『東洋新報』は、経営不振に陥っていた『東京曙新聞』（もとは木戸孝允が部下にはじめさせた『新聞雑誌』でした）を買い取り、その名称が改められたものでした。

『東京日日新聞』、『明治日報』、『東洋新報』などは「御用新聞」と呼ばれました。

明治ひとけた台に「御用新聞」という言葉は“文明開化政策を進める政府を助け、その功績が政府にも認められている一流の新聞”という響きを持っていましたが、自由民権運動が盛んになった明治 10 年以降からは“政府の手先”といった侮蔑的な意味で使われました。

さて、反政府の論陣を張る民権派の新聞に対抗するために、政府系の新聞を当代一流の人物にも出してほしいと考えた大隈重信、伊藤博文、井上馨たちは、福澤諭吉に白羽の矢を立てます。

『学問のすすめ』（明治5年～明治9年刊）や『文明論の概略』（明治8年刊）を書き、文明開化を説く一方、慶応義塾を主宰し多くの門人を持っている福澤は、当代一流の知識人であり言論人でもあったのです。また、慶応2（1866）年刊行の『西洋事情』のなかで福澤は早くも新聞が文明開化を進め人智を開くうえで大切なものということを書き新聞に対して深い理解を示していましたから、これ以上適切な人物はいないと思われたのでしょう。『西洋事情』のなかで福澤は次のように書いています<sup>15</sup>。

およそ海内古今の書多しといえども、聞見をひろくし事情を明らかにし世に処するの道を研究するには、新聞紙に若くはなし

大隈、伊藤、井上たちは、明治13年12月の初めに中上川彦次郎（後に三井財閥の総帥となる）を福澤諭吉のもとに送り、政府系新聞発行の責任者になることを頼みます<sup>16</sup>。

四月末に福澤は大隈邸に行き、待ち受けていた大隈・伊藤・井上の3参議と会談します。このとき改めて新聞発行のことを頼まれました。井上が説いて言うには

「今の新聞や演説はただいたずらに人々を扇動し社会の安寧を乱しているようなものだ。この難しい国際情勢のなかで、政府と国民がただ争っているだけ、国民同士がいつまでも争っているだけというのでは、外国から侮られるだけである。こういう情勢についてあなたはどう思うか。私たち政治に携わっている者は国家の為にこういう状況を大いに心配しているが、きっとあなたも国の将来を思って心配されておられるはずだ。国の将来を思うという点では政府の人間、民間の人間という区別はないのではないか。」

伊藤や大隈も異口同音に福澤を説得したのです。

福澤は「お頼みのおり新聞社を起し新聞をやるということは大変なことなので少し考えさせてほしい」といい家に帰りましたが、年が明けた明治14年の1月に、井上馨の邸に行き、「いつまでも国会を開こうとせず、ただ民権派を力を取り締まっているような今の内閣のご機嫌とりをするような新聞の責任者にはなれない。国民は国会を望んでいるのだ」と断りました。すると、井上はかたちを改めて「しからばすなわち打ち明け申さん、政府は国会を開くの意なり<sup>17</sup>」と福澤に語ったのです。さらに福澤が民権派が国会の多数を占めたらどうするのかと尋ねると「たとえどのような政府が多数を占めようとも、それは国民の支持を受けたのだから仕方がない。潔く政権をその政党に渡すつもりだ」と答えたのです<sup>18</sup>。

福澤はこれを聞き感動して「そこまでお考えになっているとは思いませんでした。そういうことであれば、明治政府にとってもよいことですし、何よりも日本の国のために喜ぶべきことです。私もお国の為になることですから、お力を貸しましょう。喜んで政府発行の新聞の責任者になり

<sup>15</sup> ただし引用は、（有山、2008年 40頁）からの再引用である。引用に当って、読みやすいように表記などを変えた。

<sup>16</sup> 坂野潤治 1989 『大系日本の歴史：近代日本の出発』（13巻）小学館、64頁。

<sup>17</sup> 坂野、同上；ただし、生徒が読みやすいように表記を一部改めた。

<sup>18</sup> 有山輝雄 2008 『「中立」新聞の形成』紀伊國屋書店、42-43頁。ただし、読みやすいように内容を付け加えたりやさしく言い換えたりしている。

ます」と答えたのです。

ところがその後、この3人の参議の結束が崩れます。

伊藤や井上は“いずれは国会を開くがまだ国会を開くのは早い”と考えていたのに、大隈が3月に左大臣ありすがわのみや栖川宮に明治14年中に国会を開くべきだという建議書を提出したからです。太政大臣の三条実美からこれを知らされた伊藤と井上は大隈の裏切りだと激怒しました。大隈から事前になんの相談も受けていませんでしたし、そもそも大隈も自分たちと同じようにまだ早いと考えていると思っていたからです。

そこで伊藤と井上は、黒田清隆などの薩摩閥と組んで大隈を政府から追い出すことにきめたのです。また、このとき、福澤に新聞を出させようという話もなくなります。福澤と大隈が手を結んでいるのではないかと疑ったからです。

伊藤や井上、黒田たちは民権派の攻撃をかわすために、10月12日、東北・北海道巡幸の旅から前の日に戻ってきたばかりの天皇に「明治23年に議員を召し国会を開く」、「黒田が進めていた北海道開拓使の官有物の払い下げは中止する」という勅諭を出してもらいました。官有物の払い下げは政府内部の薩摩閥が薩摩出身の政商五代友厚の便宜を図っておりけしからんとして民権派から攻撃されていたからです<sup>19</sup>。

こうして、政府の援助を得て福澤が新聞を出すという話は消えてしまったのですが、福澤は自分自身の力で政府寄りでもない民権派でもないいわば「独立」の新聞を出すことを決意します。

そして明治15（1882）年3月1日、福澤はついに『時事新報』を創刊します。

福澤はこの創刊号の社説のなかで、『時事新報』の基本方針は「独立不羈」であると宣言し、それを次のように説明しました<sup>20</sup>。

「私の主義とするところはまず個人が独立した人間となりその個人がしっかり独立した家庭を作り、そういう家庭が集まって社会ができさらに独立した国家をつくるのが大切だということである。こういう考え方をするものであれば、それが政府であれ、また政党であれ、また民間の会社や学者の集まりであれ、同じ志を持つものとして応援するというのがこの新聞である。逆に言えば、そういう考えができないものは、どんな相手でもこれを敵とし、徹底的に戦うつもりである。」

自分の立場を明確に決め、その立場に合うなら政府の味方もし、また政府の考えややっていることが自分の「独立不羈」という考え方に合わない場合には、反政府の立場にも立つということを言っているのです。

『時事新報』は一流新聞に成長し、このときから昭和11年までおよそ半世紀続いたのです。

<sup>19</sup> また、大隈や伊藤、井上たちも黒田の北海道開拓使の財産払下げには反対でした。黒田を最も追いつめていたのが大隈でしたから、これを政府から追い出せば黒田にとっては有り難いことでした。

<sup>20</sup> 有山、2008年 40-41頁。ただし、引用に当っては現代語に直し、表現を分かりやすくするとともに文意が通るように若干の内容を書き足した。